

第 88 回麻布獣医学会 一般演題 1

重症熱性血小板減少症候群患者から分離されたウイルスに 対するイヌの抗体保有状況（広島県）

高尾 信一¹, 島津幸枝¹, 東久保 靖¹, 西川 英樹², 河村 美登里³

¹ 広島県立総合技術研究所保健環境センター,

² 広島県感染症・疾病管理センター, ³ 広島県動物愛護センター

1 はじめに

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、中国において 2009 年頃より患者の発生が報告されるようになり、2011 年に初めて原因ウイルスが、ブニヤウイルス科フレボウイルス属の SFTS ウイルスであると特定された新しいダニ媒介性の感染症である。我が国においても本年（平成 25 年）1 月に国内初の患者が確認されて以降、8 月 9 日現在までに近畿、中国、四国、九州の各県において合計 36 名の患者（広島県における 2 名を含む）の発生が報告されている。本感染症は、SFTS ウイルスを保有するマダニが媒介すると考えられているが、ヒトでの患者発生の実態やウイルスを保有しているマダニの割合及びそのウイルス保有マダニが生息している地理的分布については明らかになっていない。マダニは自然界では野生動物を吸血源としているが、家畜やイヌ等の動物も吸血されることがあり、その際に吸血したマダニが SFTS ウイルスを保有していれば、それらの動物もウイルスに感染する可能性が考えられる。今回我々は、広島県内におけるウイルス保有マダニの分布の状況を推定するために、県内のイヌについて SFTS 患者から分離されたウイルスに対する抗体保有状況を調査したので概要を報告する。

2 材料と方法

対象は平成 20 年 9 月から平成 25 年 4 月の間に、広島県動物愛護センターに保護されたイヌ 311 頭（野犬 165 頭、放浪犬 57 頭、飼犬 89 頭）から採血した血清を用いた。ウイルス抗原は、広島県内で発生した SFTS 患者から分離されたウイルスを Vero 細胞に感染させ、0.2% ホルマリンで不活化処理後、アセトン固定したものを用いた。抗体価の測定は、FITC 標識抗イヌ IgG 血清を用いた間接蛍光抗体法で実施し、抗体価が 40 倍以上を示したものを抗体陽性と判定した。

3 結果および考察

311 頭のうち合計 24 頭（7.7%）が抗体陽性であり、それらの抗体価は 40 倍～1280 倍の間であった。イヌの飼育状況別に見た陽性率は、野犬が 10.9%、放浪犬が 3.5%、飼犬が 4.5%であり、野犬において抗体保有率が高かった。また抗体保有が確認されたイヌについて、それらが保護あるいは飼育されていた場所をみると、県内の特定の地域に偏在しているわけではなく、広島県内の 23 市町中 9 市町で抗体陽性犬が確認されたことから、ウイルスを保有するマダニは広範な地域に分布している可能性が示唆された。